

輸出事業者別 丸太、製材とも前半好調、後半失速

輸出意欲おう盛もフレート高がネックに

瀬崎林業（大阪市、遠野嘉之社長）の2021年国産材原木及び製品輸出実績は、約19万5,000㎡（前年比5.4%減）で微減となった。20万㎡超えを記録した前年からわずかに実績を落とす結果ではあるが、21年は原木輸出業界全体が後半に数量を減らしている。同社は年初から夏までの実績が前年越えて推移。後半は輸出価格下落と仕入れコスト高による利益率低下を勘案し、輸出見合わせに動いた側面もある。また年後半は原料不足に悩む国内の製材工場や合板メーカー向けの出荷にも力を入れている。

国産材輸出の国別内訳は、約75%が中国向け。原木・製品の内訳では、原木がほぼ全量に近い割合だ。原木輸出は九州の主要港を出口としており、取扱数量の上位3港は細島港、志布志港、佐伯港。ただ21年は後半の輸出減の影響もあり、上位3港からの輸出量はいずれも前年を下回った。このほかにも、中津、三池、大在、門司の各港からも輸出している。近年の輸出港はこの7港で安定。地元業者と連携構築に力を入れてきた同社では、港湾との協力関係も構築しており、出荷体制は盤石といえる。製品輸出は、博多及び東京からの実績があった。いずれの港も同社による製品輸出は21年が初めてだ。

集荷面では、原木価格上昇の影響から仕入れ価格も強含み、コスト負担は増した。ただ全国的に原木がひっ迫するなかでも、九州の林産業者や行政とのタイアップ効果は発揮され、必要量の集荷は果たせてきた。